

2017 年 12 月 17 日（日）「苦難の共有」

マタイ 14:1-12

1 そのころ、国主ヘロデは、イエスのうわさを聞いて、2 侍従たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が彼のうちに働いているのだ。」

3 実は、このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕らえて縛り、牢に入れたのであった。4 それは、ヨハネが彼に、「あなたが彼女をめとるのは不法です」と言い張ったからである。5 ヘロデはヨハネを殺したかったが、群衆を恐れた。というのは、彼らはヨハネを預言者と認めていたからである。

6 たまたまヘロデの誕生祝いがあって、ヘロデヤの娘がみなの前で踊りを踊ってヘロデを喜ばせた。7 それで、彼は、その娘に、願う物は何でも必ず上げると、誓って堅い約束をした。8 ところが、娘は母親にそそのかされて、こう言った。「今ここに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて私に下さい。」9 王は心を痛めたが、自分の誓いもあり、また列席の人々の手前もあって、与えるように命令した。10 彼は人をやって、牢の中でヨハネの首をはねさせた。11 そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところに持って行った。12 それから、ヨハネの弟子たちがやって来て、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告した。

【序論】

皆様が日頃、最も多く触れているものとは何でしょうか。職業にしても、趣味にしても、宗教にしても、何らかその人自身を形成しているものがあると思います。幼稚園の先生には、子どもと触れ合っている何かがあると感じることが多いです。私の伯父に警察官の人がいますが、やはり独特の雰囲気があります。

イエス・キリストを信じる人々は「クリスチャン」または「キリスト者」と呼ばれます。その名の通り、その人の内側にキリストが見える、キリストの香がする、そういう存在でありましょう。その聖なる香が自分の内側から放たれているかどうか。この世の流れに身を任せているうちに、いつしかキリストの香を失っていたというのは、怖いことです。私たちが目指しているところは、一切のものをキリストと共有すること。栄光も、苦難も、喜びも、悲しみも。それはあたかも夫婦がすべてのものを分け合っていくかのような関係です。

今日はバプテスマのヨハネの殉教の場面を見てまいります。私たちは彼の無残な死に

方の内に主イエスの受難を見る。ヨハネについて「キリスト者」と言われている聖書箇所はありませんが、彼はまさしく主イエスの先駆けとして生き、主イエスと苦しみを受け合って死んだ人物でした。

【本論】

本論 1. アンティパスの狼狽

そのころ、国主ヘロデは、イエスのうわさを聞いて、侍従たちに言った。「あれはバプテスマのヨハネだ。ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が彼のうちに働いているのだ。」(14:1-2)

ここでは 16 章まで続く「イエスとは何者であるか」という問題が引き続き扱われています。「ヘロデ」とは、かつて主イエスが誕生された頃、2 歳以下の男の子を皆殺しにした悪名高き「ヘロデ大王」の息子、ヘロデ・アンティパスです。彼のことを「**国主**」(ὁ τετράρχης)と呼んでいます。これは国を分割して治める「領主」のこと。ヘロデ大王が死んだ時に三人の息子たちの間で領土が分けられたのです。ユダヤ・サマリア地方はアケラオ。テラコニテ・ゴラニテス地方はピリポ。ガリラヤ・ペレヤ地方はアンティパス。アンティパスがこの地方を支配した期間は、紀元前 4 年～紀元 39 年の 43 年間。14:9 では「**王**」と呼ばれていますが、実際には王ではなく、「領主」と呼ぶのが正確でしょう。ただ、彼がその地方の人々に「王」と呼ばせていたのかも知れません。

さて、このヘロデ・アンティパスは主イエスの噂を聞いて、バプテスマのヨハネの再来だと怯えていました。後で経緯をご説明しますが、バプテスマのヨハネはヘロデの罪を指摘した^{かど}廉で捕えられ、斬首刑に遭ったのです。その不法な処刑は、ヘロデ自身にとってある意味で不本意なものでした。彼がそうしたかったと言うより、妻のヘロデヤの陰謀によって一面はめられた形で行なったものだったのです。義なる預言者を殺したことは、ヘロデ自身の心を苛んでいた。そして、ヨハネの霊が自分に復讐するのではないかという怖れを抱いて生きていたのです。

そんな中で聞こえてきたナザレのイエスの噂。その力ある御業と御言葉の権威は、ヘロデから見てもバプテスマのヨハネに似ていました。同じ匂いがする。ヨハネと同じように悔い改めを宣べ伝え、弟子をつくり、洗礼を授けている(ヨハネ 3:22, 26)。似ているのは尤^{もっと}もなこと。ヨハネは主イエスの先駆けとして現れ、主イエスは来るべくして来られたメシヤ自身だったのですから。ヘロデはまだ主イエスに会ったことがなかったにも拘らず、両者の共通点に気づいたとはなかなかかなものです。つまり、バプテスマ

のヨハネは、主イエスと同質の何かを持っていた。「義なる者」「神から来た者」としての独特の風格、毅然とした態度、そして同じ香を放っていました。ヘロデはヨハネの中にキリストを見、キリストの中にヨハネを見たのです。

本論 2. ヨハネによる断罪

実は、このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕らえて縛り、牢に入れたのであった。それは、ヨハネが彼に、「あなたが彼女をめとるのは不法です」と言い張ったからである。ヘロデはヨハネを殺したかったが、群衆を恐れた。というのは、彼らはヨハネを預言者と認めていたからである。(14:3-5)

ここからは過去の出来事の回想です。ヘロデがヨハネを殺した経緯が綴られていく。アンティパスは元々、ペレヤの東に隣接するナバテヤのアレタス王の娘と結婚をしていました。しかし、異母兄弟ピリポの家を訪ねた時、その妻ヘロデヤと恋仲になり、求婚したのです。ヘロデヤはヘロデ大王の孫娘で、アンティパスからすると姪に当たります。ピリポにとっても姪。このヘロデヤという女性もしたたかで、アンティパスの政治的才覚を見抜いたのでしょう、ピリポと別れてアンティパスの許へ行くことに同意しました。しかし、彼女は一つの条件を付けた。それは、アンティパスに先妻との離婚を求め、彼女を追放することでした。恋とは斯くも人を盲目にするものなのか。アンティパスはそんなことをすれば自分の身に何が起きるかということを考えもしなかったのでしょうか。分かっているのに想いを抑えられなかったのか。ヘロデヤの言いなりになって行動に及んでしまいます。追放された先妻は父親の許に戻りましたが、アレタス王は怒り、軍隊を差し向け、アンティパスの軍を壊滅させました。

アンティパスが兄弟の妻を奪ったことはレビ記の律法に違反します。「**あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることである**」(レビ 18:16)。ヨハネは権力者の罪をも暴き、何らかの形で本人の耳に届くメッセージを語ったのでした。これはまことに勇気の要ること、自分の命を投げ出しても義を貫く預言者の姿そのものであります。歴史家ヨセフスによると、アンティパスは「扇動」の罪でヨハネを処刑したとされているようです。このような書かれ方も全く根拠がない訳ではないでしょう。ヨハネの民衆への影響力が極めて大きかったので、彼のメッセージがアンティパスに対する民衆の反感を募らせていたことは言うまでもありません。

アンティパスはヨハネを捕え、マケルスの牢獄につないだと思われます。この牢獄には地下牢が設けられていました。マルコ 6 章に並行記事がありますが、そこではヨハネを殺害したがっていたのはヘロデヤであったと書かれています (6:19)。そして、ヘロ

デ自身はヨハネを聖人と認めて保護を加えていたともある (6:20a)。更に、ヨハネの教えを聞く時に、当惑しながらも喜んで耳を傾けていたとさえ書かれているのです (6:20b)。このように、アンティパスには一定の良心があったようで、自分の罪についてもある程度は理解していました。そして、主イエスをヨハネの再来と信じるほどに、聖なる香を嗅ぎ分ける嗅覚も持ち合わせていました。しかし、彼の人格的問題とは優柔不断にあったのです。彼は本来、ヨハネをいつまでも投獄しておいてはいけなかった。釈放を先延ばしにし、ヨハネのメッセージに耳を傾けながらも聞き従わずにいたため、ついにヘロデヤの策略にはまり、ヨハネを殺す決断をしてしまうのです。

本論 3. ヨハネの殉教

たまたまヘロデの誕生祝いがあって、ヘロデヤの娘がみなの前で踊りを踊ってヘロデを喜ばせた。それで、彼は、その娘に、願う物は何でも必ず上げると、誓って堅い約束をした。ところが、娘は母親にそそのかされて、こう言った。「今ここに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて私に下さい。」王は心を痛めたが、自分の誓いもあり、また列席の人々の手前もあって、与えるように命令した。彼は人をやって、牢の中でヨハネの首をはねさせた。そして、その首は盆に載せて運ばれ、少女に与えられたので、少女はそれを母親のところを持って行った。それから、ヨハネの弟子たちがやって来て、死体を引き取って葬った。そして、イエスのところに行って報告した。(14:6-12)

古代社会では、王が自分の誕生日に家族や側近、地方行政の長官などを招いて、盛大にお祝いをすることがよくあったそうです。それは列席者に自分の権力を誇示する場でもあった。ヘロデヤはその日に照準を定め、娘を使って自分の計画を実行に移します。この時、踊ったとされる娘は、ヨセフスによれば「サロメ」という名前であったようです。彼女は当時、結婚適齢期で、恐らく 12 歳くらいであったろうと言われています。彼女がどんな踊りをしたのかは具体的に書かれていませんが、酒に酔った客を飲ばせる猥褻なダンスであったと考えられています。ヘロデヤは夫の弱い部分を見抜いていた。彼が若い娘の踊りに夢中になること、彼女を高く持ち上げるであろうことを想定していたのです。本来、酒席での踊りというのは売春婦のすることでしたから、ヘロデヤは自分の目的達成のために王の娘を売り物にした訳です。日本では北条政子、中国では西太后、呂雉、武則天といった女性が有名な「悪女」として名を連ねますが、イスラエルの歴史にもイゼベル、ヘロデヤはそれに匹敵するでしょう。憎き相手を葬るためなら手段を選ばない。

アンティパスは案の定、娘の踊りに鼻の下を伸ばし、「願う物は何でも必ずやろう」

「国の半分でも与えよう」（マルコ 6:23）と大言壮語しました。客人に自分の気前良さを見せようとしたのでしょう。元より領主にはローマ帝国の国土を与える権限などありません。まことに思慮を欠く支配者の姿です。ヘロデヤは娘に「王がこのように言ったら私のところに来なさい」とあらかじめ伝えていたと思われます。娘は忠実に母のところへ行き、何を求めるべきかと問う。すると、「バプテスマのヨハネの首を盆に載せて持ってきてほしい」という要求が課せられたのです。娘も娘で、このようなことをサラリと言ってのけるところは、ヘロデヤの娘ならではのところでしょうか。これは酒のつまみの代わりにヨハネの首はいかがですか？というブラックユーモアです。このような要求を突きつけられたヘロデは、本来どうすべきだったのか。自分の誓いは不適切だったとして、取り消すことはできなかったのか。律法にはこうあります。

人が不実なことを行い、あやまって主の聖なるものに対して罪を犯したときは、その償いのために、羊の群れから傷のない雄羊一頭、聖所のシェケルで数シェケルの銀に当たるとあなたが評価したものを取って、罪過のためのいけにえとして主のもとに連れて来る。

（レビ 5:15）

つまり、間違った誓いは、悔い改めのしるしが伴えば、取り消すことができたのです。ヘロデにはまだ罪を捨てて神に従う余地がありました。しかし、彼はあくまでも自分の面子を保つために、ヘロデヤの要求を飲み、ヨハネを殺害したのです。この処刑は二重の意味でユダヤの法律に反していました。第一に、裁判が行なわれなかったこと。第二に、斬首という方法が採られたことです。神から遣わされた大預言者は、実に下らない人間の会合、酔っ払いの決断によって、その命を奪われたのです。ここには人間の罪と、神に付く者の受難という、明確な色分けがあります。そして、ヨハネの死は主イエスがこれから向かっていく受難、不法な裁判と十字架刑という、更に極まる人間の罪と義人の死とを予表しているのです。

【結論】

読み終えてみていかがでしょうか。何と理不尽で希望のない物語であるか。私自身は大変後味が悪かったです。しかし、この世的には義人の敗北とも見えるこの出来事の内、神の義が現れている。ヨハネの死はキリストの死と一つであった。冒頭で、キリスト者はキリストと一切のものを共有するということを申し上げました。ヨハネは主イエスと受難の死を共にしたのです。そして、この殉教者は間違いなく主イエスと栄光をも共にするでしょう。これは主イエスを信じるすべての人に言えることです。キリストと共に苦しみ（ローマ 8:17）、共に十字架につき（ガラテヤ 2:20）、共に死に（コロサイ

2:20)、共に葬られ（ローマ 6:4）、共に生かされ（エペソ 2:5）、共に甦り（コロサイ 3:1）、共に栄光を受け（コロサイ 3:4）、共に神の国を治める（ルカ 22:30）。夫婦が喜びも悲しみも分け合うように、私たちは主イエスとすべてを共有する者とされているのです。このキリストの香を放つ者になりたいと思います。私たちが日頃最も多く触れているものは何か。聖なるものに触れ続けているならば、その人の内から聖なる香が出てくるでしょう。

【祈り】

私たちと一切のものを共有して下さる主イエス・キリストの父なる神様。私たちが主イエスのゆえに苦しむならば、それは幸いなことです。それこそが、私たちが主と共に歩んでいる証となるでしょう。いえ、主イエスが私たちの内におられることの結果であります。私たちの内から溢れ出るものとは何でしょうか。悪いものばかりが出てきてはいないかと恐れます。どうか、主イエスの聖なる香を放つ者とならせて下さい。主との密接な交わりによって、私たちの人格が、人生が形成されていきますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

義人の受難を通して、ご自身の義を貫き給う、父なる神の愛。

ヨハネの死をさきがけとし、十字架を耐え忍び、弟子の歩むべき道を整え給うた、主イエス・キリストの恵み。

栄光も、永遠の御国も、すべてキリストと共有させ、その聖なる香を世界に放たせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。